瀛海異聞

七

3567
18-5

環海異聞巻之九

伊爾歌都斡發軔伯多瑯蒲爾孤

道中記

此イルコーツカの地に滞留する事已に八ヶ年の星霜を経ていつの時帰帆すへしとも目当てもなく空しく年月を重ねたりしにさるにても憂き享和二年春の三月頃しも定つて所年来の日本人

外拾三人の名ハニヨライ　新範付添　都合拾三人　首

達寸拾之人の名ハ

舵取　　吉文

水主　　傳之助

〃　　民之助

〃　　辰範

〃　　清範

〃　　八之助

者ニ役人之車ニ而参着り候得何れ車ハ
二人乗ニ而御座候一乗りニ四疋馬ニ而
挽之二人乗ニ候所ハ七車ニ而之是ニ候得し
一車ニ八三人乗り従り役人ハ五人乗ニ而
都合八車ニ而ニ七車と深冨ニ候得し
是へ外ハ一車ハ三人乗ニ而候へし
通譯ニ付候而ニ　コヒシ二十　町年寄　右町年寄れ
ニ而見送り候り

車の上人の乗る所の図ハ皮張にて作る也
前に台あり其後ハ垂木前へ垂れを掛て
見る物なく両天の節ハ屋根をかけさす
内ハ女人向ひあふて乗る扨車の前後様
あり引ふより出る事のなしこれハ人にて牽き
先け駿の先軒に綱組を結ひ行扨これに
勝点し馬足をすむ先きるの役人乗り
行ことハ路を伴けてあり其路方高さ乗るの

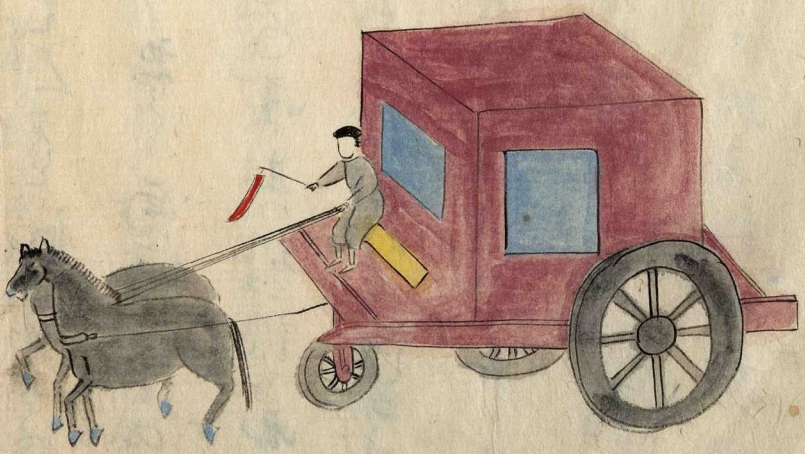
其差ある所ニより略く其形状の略に曉
其了躰須用る物を取除して用る物と
精粗の差あるのミにして大概相同し故弁
用ゆる物ハ「キヒツカ」と唱ひ弾下にして用る
物ハ「コレイモ」と名付て車ハ和漢共ニ西
輪ヨリ其ハ異なれハ車前の方も小輪
一ツ有て前足の馬ニ牽するもの以三輪ハ
發後の利あるを低造り前の輪ハ形小之

後よりの海にて　太す補方の大八車よ
積大なる前なる　小海ハ後海の中に往
ありしは小海に付きて　上の方に往く出て
有り其ほく三寸　下たけハ上へ向なり
こまかに　其海下へ落あくるハ　後の大海
之間第なる之物　往くの上ハ　居木形乃
うでをあつて　是より前なる　馬の背の前へ
鞍付　其鞍を　居木のたえるに渡細さ付

ニ月ニ吉日始ニ悪ケ所をかくしく其
板足の馬のうしに行る所得にしても
持ちかへて板にそむく人のかぞへる所の
国ハ悲しくも候浮なり其国の高サハ車
上カ座板ヨリ屋須延ヨりも行る人のごと
く板にそむく寒ハ前に一ツ後に二ツ組二ツの方
ハ中にあり其つま板より板の上にも浮ぶ其座上の
前に寄せてあるべきハ候あり風にあふ前ハ

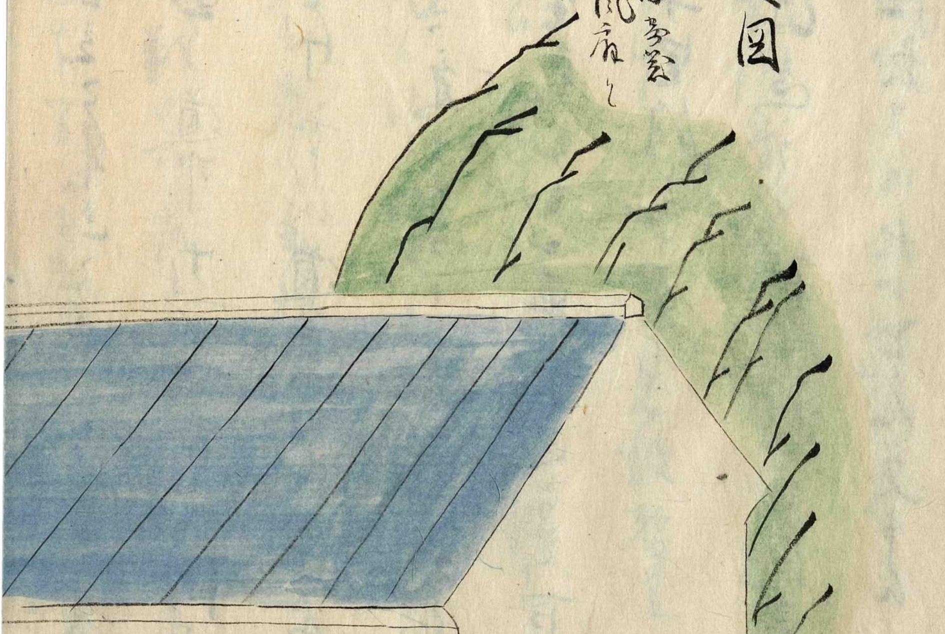
見えしへ甚しく知りとる為なりしに出たる
道中の節もうしえ比よりハ車の前の
横のうて木を下ける事又たれ入口
の前に羽の板を付重き雨(アメ)の時ぞ見えし
たれて黒の如く下け置る是ハ車の
はね上る泥(ドロ)など防く為なる是
は路程に用る車の板に之段々の
車も見えし同しくたるく簾黒々る見え之

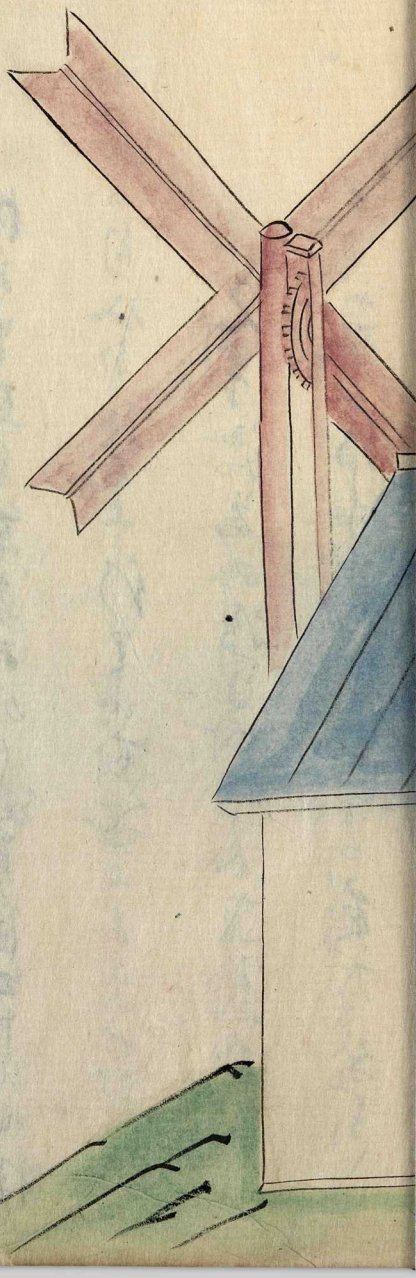
車馬圖



風扇之図

此物の写未詳
図説之風扇らし
見へし

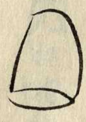




海上ニ而ハ雨と日和の見へハ
極と北辺止白星地方の度有の隔て
へだゝりハまりしと土地志ニも見へ行ハ
方位の度数ニ有の地方如く有るものと心得
再考あるへし
又此所ニ云星経行ドンスケと云者宗徒
色道と號するものなし
一 ダルダリヤの商売見たり居るオロシイア人と

雜夜の様子之　此地の浮浪なる様を

一　韃而靼人ハ肩まて頭白く天窓ハ禿頭ニ

て帽子ハ陣羽子  めしけ物を冠りて刀

差ありとぞ

脇丈ゟイルコラウツカ分ハ三千里程ありとぞエカテレ

ボルカより訓く名く

一　家造りトニスケリ様なく殺も不足なりけ

所分　山々ハ遠く見ゆ

一 此所鐵を産する所ハ陽濃産するよし 此

を山のやうに積重ると車の上より見えるなり

丈なる車へ二三り乞取り出し此所なるベートルブ

ルク迄凡そ凡百里程有と云

一 人家皆石造りにて町家も瓦家（ウワクレリ） イルコウ

ツク等よりハ廣さ一倍も有て 此方 町家さ

は地之奥類甚多く價も至極しと云ふ大

ヒヤミルしれも見自 銀の如き大奥物産の絵を哭

此他の流説ども記す

一 痘之節一円ニ大熱出て熱有頭痛小腹迄
發し面目迄種々麻疹の如き瘡作之
先ニかゆくて咳嗽後ハ色ゆく膿汁付
此病ハ益々重ニ手足漏身節下迄流て痛
甚ク腫ニ激しく痛
　其後痘之節発生も経斗りかたし時々経
麻出之の節迄哭き不知らず イルコウリカ

一黒米なとゝ云物の所謂玄米なく
かんはるまて見るに其ほとに儀国有麦
皆国によりて往(社稷)昔ニ見西陽国ニハ寺々有と
四方に皮革類諸(いは)名産有魯西亜國ニ一
と云西ニ價も様々にして云麦類雑穀(ザツコク)も出来
出来價も次第に下りて邊國(ヘンゴク)ニ流布せる麦
と見へたる故ニ延ひすは急ニ有と見れは日本
の如く此生所大和郁(くに)と同しき生麦なと出過

此繁昌の殷盛なり当世の遊観の所得の
人家代々に繁昌し町々数百町街道の屋々
車を以て往来し 両側の家々軒を並べ櫛比
民家数多建ならび家々の内縁の下も家々の家造
悉く瓦葺にして高楼あり 瀬戸町にし家作
も軒を並べ浮橋之間毎に名ある火床構も甚遊
巧を尽して下々まで足を止めてあけ行
而て瀬戸の境内の地は表向は花見の所は新緑

とうきる程ニ唯り家内の様子諸道具も皆
見ごと見ゆ食料ハ悪候牛豚雞肉の類
而大抵用ひ候へども甚調味格別のよし
一 都市の名見物役家と付属の役人へ願して
寺院ナりも壱百程あり々
見物さんとせハ二三年もかゝる程しと云
新都ペトルブルクよりハ大抵一倍も廣くなる
へしとなり

ベトルフルカの船府に上着す

イルコー州ガ二月七日奈之江船府へ着し逗

留八九日を過る

此所は是より又何にイルコー州ガを二分し府

五千八百四十三里を平ヘ旦仍りくベトルブ

ルカは当之道中車にて五千亜東百

里程は是より総而自勝也勝胃

頭倒長くして懐くさ亦ししる白河

きりむらイナと云人の車よ白車せり
白車は驚ろ乃不要く平穏にして
かしも私驚勤程なるすゞろなりさし白
車の割度極て精巧言金と費
せしとぞなり
ムスリツ々の吉里ろりさて西家日よ来
しらまし乃不美くず車をいそげは一七
日本の割るときけり

イルニーツカ出立して此所迄七千里の道中
路邑村落数十ヶ所ありへし　皇東乃本道
多くハ見渡す限わからさるハ道悦と云し
但猿猴しけく相隔るの地名あるの一
五所ありて三ヶ所ハ他の譯說ありて其
地形其情の大略をしるを緑と
上官所有隣の役人ハ管轄して人の鎮守
[illegible]

人こと煩より仕出る様にあり
西洋の流を覚え境ゆに牛肉鶏肉の
類は薬となし食し費ゆるの之其損
豚肉野牛等に更類様にあり

右覚ては弗なれは薬を桃様にも入る様に
多く漢方以後しては好む薬様を食す
料理大概右のごとし つねは美食を酒と一所に
必ず食は食時の時出して留麦醴酒にてれ

其風味よく宜しき蒲萄酒も出けり

カラフの宅逗留中見聞の雑事

一 雑肉人数三百人程有て家内の人とも
奉公勤る事にて是表通りにある棒男子
計りにて婦人はまれなり

一 家作立派に数家奥に連続すると見けり

一 虎斑或は純毛白色卯黄の色（タマゴノイロ）至て厚サ
四寸計り大サ一尋余程に割成し行平盤

札の如きハあわり柳ハ竹にて木にて作り在家
の井に居くまくして上すにて書き事ニする
時用目録の表ハ公方へ差上よし
一 世界中大るゝの寺院の様子を作る物
も毎家見候て外の御工物にも作る
見ゝて娯楽頂に製り用候も見候
一 横文字の書籍も数家重ね並べなと
見候事

一カラフ出行の前ハ車ニ乗る事ニ定馬ニ乗
先ニ馬ヲ走ハ難生ある従者等ハ先ニ従の
ものハ乗り車の後ハ従ひ人皆追ある事ニ備
私ニ為持ものもあり

一 鞁内家宅の中ニ草花を養ふ所有ニ
中花種々様々の種類あり其近ニの
園様ニ植ある園丁有ある時ハ温暖冷温
の加減を以て花ひらき其々せ実を結ばしむ

見所ニてあり孔雀ひとも竟い至り御
極まし奇草ニ木も数多あり此所ハ帝王
の遊苑の西ニありカナスタと云説も見
申而あり
一 国王乃軍兵五百人余りなりと云構と
親く見たり其ニ中ニ入程あり所々ニ
のゆるさるる 所ニ土人の家あり三層造りく
櫓ハ並く隣の上ニ有り舟座ハ数ハ石

環海異聞巻之十

国王に目見え始末之説并

一 ガラフ」の宅に十四五日逗留せしを見て五月十五日
に至り明十六日に国王に目見え給ふへき旨
相渡置日本衣裳新調を用意いたし候旨申渡
旨申渡ス仍て当日ガラフ」を先達に出仕す 命
有之者みな前頭を剃り月代頭にあり 紫原来

調ひ民の風俗花八三郎兵六茂次郎正の風
其外諸般の職人諸商人并駕足馬の車に
のせて運ひ諸出入かよふの宅ては三里町程あり
此国王宮町の内にありて城造りとは見へす屋
家庭への出入ありて一方は川流れめくりて三面は堀通
館内地形高からす広き町屋もありて七門
内に番人を見る又側には人兵鉄炮を持並立
表通屋造なり長屋の如く屋造ありて内長くも

是従り天数一体の階造りにて一階毎に
積み階子有之り重ミ見るに甚だ心えて階の
進ミ知りしより大門の幅京町土橋並べて見世
にも道行寺る往之栗田の役人等々何事も厳重ヘ
交しにて凡そ五十き上りにて自然と高下ある積に見ゆ
倉に鐵階しきもいは知れしかたし三階目しに立るか
いかにも其の象にて円え〜根石乃隣石橋と架す横
幅七八尺ある往有其橋の上を通りて其を廻り往還の

街道の曲りて其處御所に至りし橋との並木
と極めて楼下は屋門の曲りて車ゐるも通
用あり殿中ゐる毎々と第士並居る御と兵具抔か
さり来えず
む其乃毎に破損隙なり又窓乃なるく
かくいまる無に至文政人斗りもある大破
どかく荒れ屋にあらくありて寄蕪なりし社
席は落板敷狭縁あり且つ是こそなるべく後尚こし
こここく六月ます

申付ざる相應にて者もなく其傍所ゟ出され
年の長短を以て在別に定め例入没人の
人相流るる者没人の内何方もやすくせしむる国
見への附に移りても有べし名は悪く為り
たき事文照に没致すも存寄候申付奉るに
之て仕して心付すり彼免する内其事にヵラ
先達て帝王と称し母后皇后第君一同に
出しもたり母后など帝王自ら手など聟き出所

王の相應恭く

たゞあることを居ますたゞかりと用ゐるなんどゝ
後世の風俗にてたゞをとらんするなり

家職戯あり由御なり懼なき様にとてたゞ皆

に候て首をさげ平伏せんとしければ傍なる侍

し役人は前には門にて見るより礼敬して平伏する

事なれといひける足は何事も甚おかしく頭をさげ

たれば丹後原家と進み出て并たる者ぞと見けり

自ら様子をされしばしありては面々様にありては王

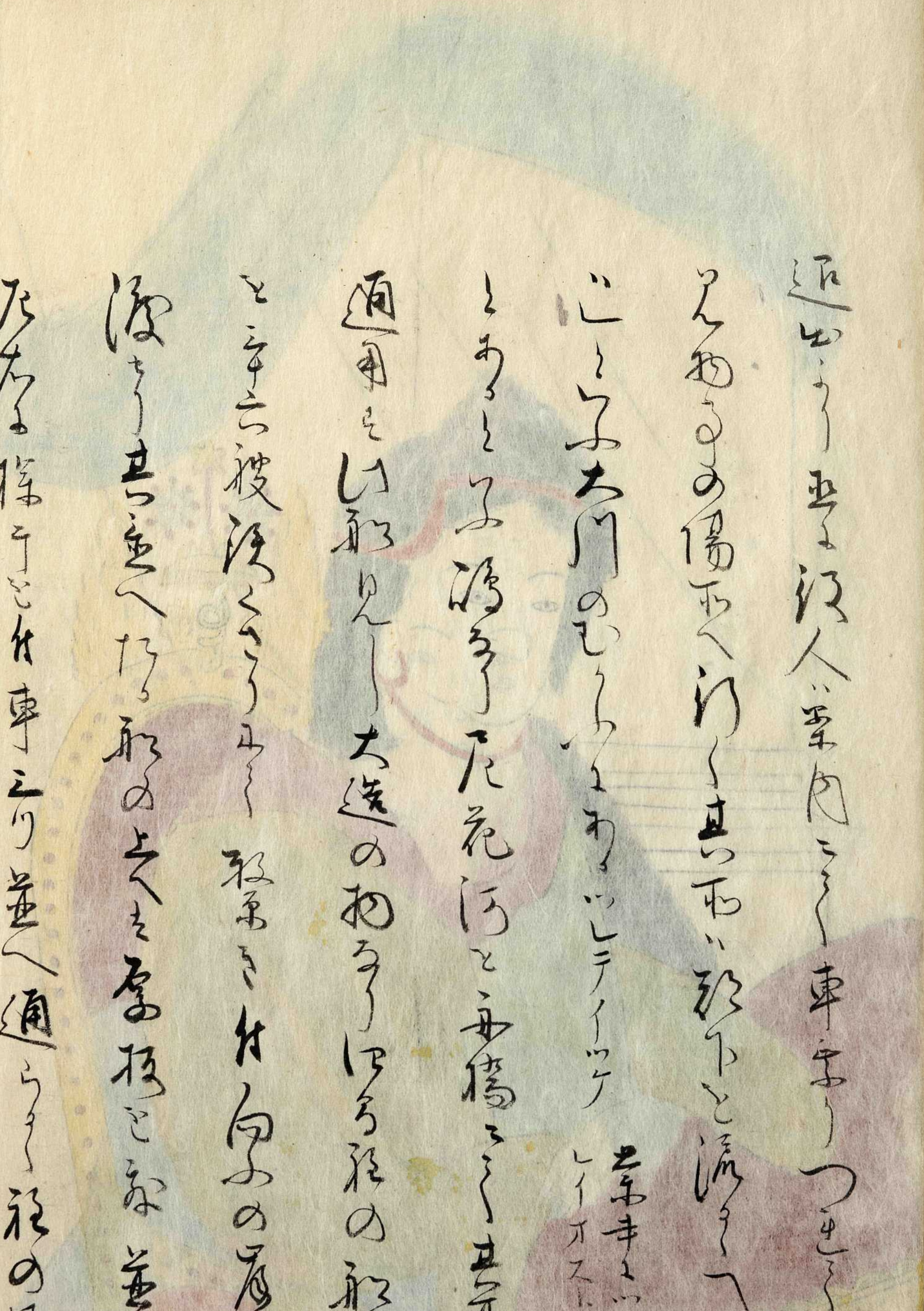
乃井にありては御原とゆるしてものに

母后の名テアヒヨシ名ロオナ
后の名ハ王閑子イメツとミ申合嫁し来
らせしよかし
弟君の名コミキノハウロイナ年廿三四と見ゆ
一 此国の王の伯孫遊侯乃人ハガラフの所に
一人もえんくず将子ミ外延年に帰朝もなし
年来ハ三府に住居乃よし
一 殿中是后ほも何も振子ミに見候

女帝へ譲せし時の事をしけるに先祖
以て格制を親しくし様を以当国に様に
先ハ異国人見物様ニ成ニて国典例様
をも見るに存て仕形にハあらず事也と存
官職ニ位階の作専ニ有之由四ハ不為
外官の事録ニ内文へ通せ事も役ニ
官人ニいへとも夫ニ稀見ニ法式有事
ある屋し院ニ彼地ニ為るへしといひし者

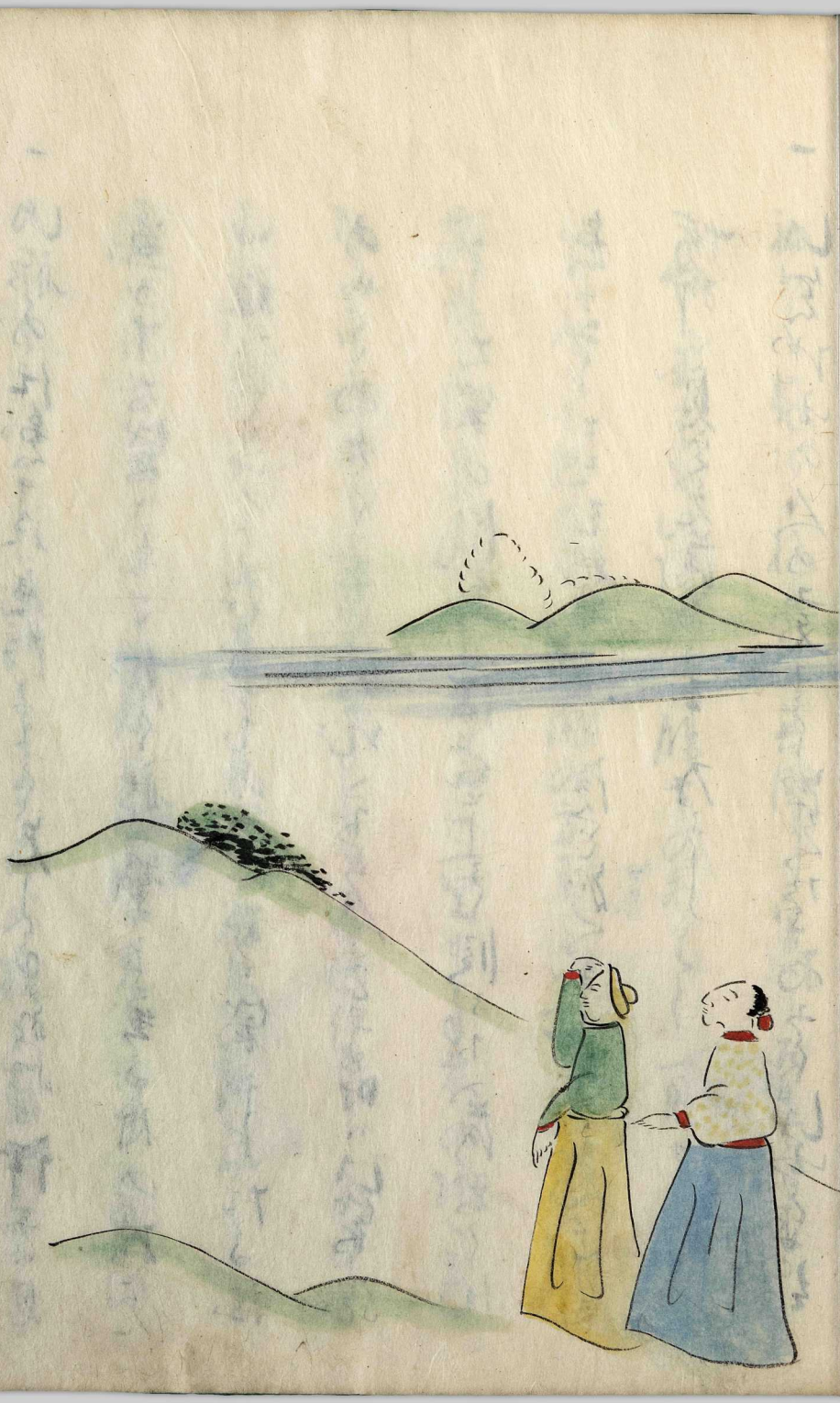
巳の縁説ゟ巳

一 男王丈姫の背像弁地に津軽都色に画
きたる物二ツ共と太十郎殿居にて承り
そろ相乃ひ見とり神都二寅ゟまいりける
此ノ後佛ゟると画る物全て写しまいらせとん
田舎之こも一段
御読とも往て相かなる様写しまいらせ共
二筆ごたゟ出候



近世より西洋人ハ案内にて東来りつきて其
ゑんねるの傷ハ洞にて其ハ疵下と流るへテ
じことハ大門のむかふにわたりしテイツア
ともるとハ鴻ある尼花洞と西橋にて其弟へ
葉卓といへしレイオストロフ
通用をはじめりんし大造のねるり洞ある石の形
と云ハ彼洋くさりみし　我葉を付同じの屋へ
渡より其道へなる形のとくを学技とも並へ
たる事様子とも付事ニ行並へ通りより石の幅

舩乃大サ一間程乃ものにて漸ニ人乗るへき同
じ之其上井ニ大球ニしたる袋有大サ三ほう程も
有へし浩地へ帰りこしたる物の様なる舩の内へ
いれハ其袋ハ天窓乃内なる程之物其袋へ風を含ミ元
浮き上しと見へぬらく動き持ちたる加様と頼
さハ玉を外らんとする様ひ有るを力未の渡り
已れく其ハ舩井へ男女人乗移り火を放て手に持に
西ニ居りし兄弟の大銃へ向ひ火を放て懐ニ炮し行る中



一はしらの仕かけ様是たけにて見しり申かたく詳には見
兼る事に候へ共并に船稽古さへ有る内の様子
中難候とも出ても太鼓の下の割にあるを太鼓の間にしたる深
のめきあるそれより大地へ下らんとする時にはし太鼓深
より太鼓の風采に備りおとして深みあるへ落てくた仕
懸ありとそ至船并遠国深き港へ其下らんとする
場所を見定め落る事乃あらし
一はし笑地あるの人の工夫にて出来たる物にてはしらの上

独り住しと見ゆる内に水ま町といふ所の人
家の庭上に落たりけれはおつと桐なりけり
此桐の葉出せしを見覚の宮より借りて持
此の人〻騒く寄集り大勢をよそほし大事とハ
わらへし其内の落ち破し籠りたる桐の実の
取りゆへ其事をいひて留め置たり此事
惜き其葉は成もしかたし此鏡をかけて浄礼
問ありしに其沙汰方まて桐一條之遊戯

に来りし舍衛にて去来の力およばざる處に空く外にある化
方と見ゆる彼等り方飛外ゆるの理気盡し
ことごとく明かなるべし經文中混鎚の差別これある
なるべしとぞ
此器を製し来と為て門とあけ三ゑものなるを
識をして上ごとあけしと明す
極と此器の風天明の御年江戸集向方新業
加え再来き損傷しく待象し気去年本国
乃渡来り新参人も来て去る所い見ゆるほどなれども

「ストーツ」又「リヱフトバル」「バル」ハ隊ヲ為ス者ト係ル者ナリ魯西亜ニテ云リ按ニ此クルモ
「羅甸ニテハ何々ふ」とらひしやらん等ノ三名アリ佛郎察国ニテ「ヱイ」
「リース」把里斯のとも地乃「カルヽスヱヽ」又ハ偏帽罷肉加あり
翻譯せしも自ら人家んと称すへきことを示
即此譯説ニ因て係る和蘭雑録中ニ称せらく
子何もなし但此因説の事ハ和蘭人といへとも自
明新考なる所のを記せしもことに其詞とも
見えすして其説とも据する所へかり合せ其兎と思

とへるに阿蘭陀に及ひに見えて其為下に記

あり譯したる「ヤンヒテスケユイヒリース」傳記家把里彭

乃瑞爾府の一地名といふ所のカルレスアートローベル氏と

人氣球といふものと製しける試むる乃為と

いふ事へ傳記家にて「ゴロベアエロスタチク

エヒといふらし是を家にて舉ぐる陸といふ事と

又西某所に暦數一千七百八十三年彼十月初

旬といふ數にあり是ハ神天明三年癸卯に當

る西文化三年丙寅より八十四年前なと見へた
り新旧二図形状精義へ置といへとも古暦様
乃頂識を製する物と見へたり但未甚宜き
と知るへからす此時を以後渡来等へトルフルカ迄も
国境にしたりしと思ふにやりしを全く以前と定め
依て旧図と新図乃類とを出し彼存在
せし所旧図をも存し此新図の類ハ存せる物と
見しらて莞（ニツコリ）爾（ワライ）としてしらて以市か事親しくえ

る訓の物まねしくは島の如しといへり偏く
顧ふに田島は和めの識りて製する所の器
新器は已に識られしものにて此時天保の
三年の頃に当りてと知けり彼等か何ゆゑには
然近来の新製品は他方より殿乃に来り曽而
更に乏も和めそく見たりしその説にて義会
もり初業和めそく其器にて見えく其名にしゆける
事院に大年もうさる殿方来方の氏殿方

里邦の遠近縦横に深副し記し其実を
見て文章かくは東郊に波狼せしを一事にして
文其実流を泥し事に不可思議の是なる之
其事考察を学へし但其遠行に重用となることに
是事を知る人から行る是非ともに流行階
思しく細らに其理を暁して彼長論して鍼
系せし風俗の情に係も考へるは思ひまするを
くさし事にや

ある日右はヒライヒリの箱の内ムスカトムりしと云ふ
あり此所く見ゆるに佳らをされたり色は諸国の
産物珠其とて一つも取らと彼へ至りき其内へ入り
て見たるに策帳の垂玉場の如くぐるり〳〵と
とりたる様に仕懸け一列毎に目すりありては
見分ならず又見たるも何物たる事を弁へず其形
ては張札得札も有れども文字を知らされは讀かた
へきは様もなし数年一日様の取りの黒物目ざし

しく其形を残せりと云り
華夷に洞かたる膀胱(ハラコモリ)の全身に長蛇のはまき
のやうく巻ほしたる物あり色は常なる物に似
たるにも雜産なく象て死にけりたる婦人
あり其後を解剖しけれは其の膀胱あり腹面
見ゆる出しし後其の為にかくし腹の中へ重
けるといへり
古きり行先之は地方に産せさる物也と云

物さびしく花にまじりて見ゆる
所に似たる大鴉(カラス)と黒く全体くろくしておそし新らす
根にさかる遠物有其形新しく生物の様
色を重ねたる桃の下に金作りの鶴有ぬ其の
仕舞ふや時を移して後其儀に鶴有り色を
見るにくらくとも根にさかる作り物有りて又
下に幡切(バツタ)の遠り物有り流行くる生の物と
変らす

男女乃陰陽在て七ヶ年経の物を始らすニ入て
こし業多く没し在り是ハ変せる所の
大物なし君有し也ニ死後是と成る所ハ指
へ在なし

世界中諸国の衣服を集め座付る所あり一向見
馴ぬ物ともなり其内唐人装束傘履なと見へたり
此中に日本の衣服もあり見覚へ有りやと尋ぬ何も
く知りや見へ分かたし彼人指示しくし是知り

へに云袴も其も通りなく衣服の製も是ゟ出へ
かるへし
扨又浮世界の事なとハ何そ其を限る事
きやゆきに違へる事あるへし
又扨又はムスカリモリと云ものハ何と云事に是を
又ハモスカラトレ上と云所に浮世而て集めし所
かくといへりは而張の大勝といふ者まて是を本
第四世界中の浮世を悉く集め往きて供

籠するの府庫と見ゆる芳渥としてあり錦とし
奇ニするある物ハ十種万果見まはしてある物もあるへし
頑愚の漂民も耳目ニ觸まし行ある物のミ
所々に一河見ゆる河へと橋もありしする
へし 惟さまある物なるぬ斗り見えて来りしに送
恨み斗のみなし
は道所ニ大いなる球とハ籠むる所とも見えもたり其家
石造りにして十間程もあり二階造りなり戸口の縁

と宗ゟ内へ入たり

王内へ入しハ五間程もあるつゞき大隅あり吉隅

あり子のこゝろ内ハ定寵なりし隅の内へ入る

三人程のにあり中ゝ入れハ大空間ありて勝負

を有りみなとゝ勝をうけたり大隅の勝内へ入り

たるゝ一とし扨道の仕懸とぬり一方の隅秘

と定しけれハ内将旗戦しぬれハ寒り上の方ゝ

目とあまたの星形ましたり勝負をうけ居たる

天象を示すものは何にて暁りしがたくくと云へ
とも其略說とありて是を思ひやりて図を製す
る事左のごとし

環海異聞 巻之十五

三本与